

「自在の像」誕生の由来



東京同窓会前会長

小林 肇氏

〈聞き手〉
教頭 越後美緒子



〈はじめに〉

「自在の像」——能代高校生が朝な夕な仰ぎ見ては、日々の生活に取り組む気持ちを新たにし能代高校生としての誇りをかきたてられる存在として、今や能代高校のシンボルとなっています。

「自在の像」は本校が樽子山（現在、能代市文化会館、中央公民館、市立図書館などのある区域）からここ高城への移転を完了し創立五十周年を祝った昭和五十年に、旧制能代中学校時代の卒業生小林肇氏の篤志によって寄贈されたものです。

全長八・七メートル。力強い若者のブロンズ像は凛とした目を輝かせ、東方をゆびさして立っています。像の制作は美術の戸松恭一先生、寄贈を促したのは当時の鎌田宏校長でした。

その時から二十六年経ち、「自在の像」誕生のいきさつを知らない人も多くなってきました。像に託された寄贈者はじめ関係者の思いをきちんと伝えていかなくてはならないと考えて小林氏にいろいろお尋ねしたところ、次のようなお話をうかがうことができました。

この機会に「自在の像」の由来を知り、先輩の母校に対する熱い思いを将来に語り継いでほしいと思います。

——「自在の像」を母校にお贈りくださるようになった経緯をお話してください。

私は、戦局の悪化が地方都市の学校にまで影を落とすようになっていた昭和十九年四月に、樽子山にあった旧制能代中学校に入りましたが、一年生の時の二月に学校が火災で失われてしまいました。(注①参照)戦後昭和二十三年三月に新しい校舎が同地に建ちましたが、私たちの学年は授業で使用することはできず、卒業式だけをその一隅の教室で行ったのです。

昭和四十五年、広い敷地に新しい校舎を建設しようという機運が高まり、多くの方々の努力の末、昭和四十七年十一月から現在の高埕校舎の建築工事は始まりました。

昭和四十九年、着々と工事が進む中、その年の四月に着任された鎌田宏校長から私は新校舎の設計図を見せていただきました。校舎の火災、仮校舎での授業、そして戦時下の学校生活と、恵まれない青春時代を余儀なくされた者にとって、新校舎の図面は本当に立派な学校の姿を想像させるものでした。

鎌田校長は私の能代中学校時代の担任であり国語も教えていただきました。私は自分の会社の求人などのために帰郷するたびに、鎌田校長をお訪ねするのが楽しみでした。そんなある時に、鎌田校長から「新校舎落成を機に何か寄付を」とのお話がありました。いったい何がいいのかという考えをいろいろうちに、私はあの焼失してしまった樽子山の校舎を思い浮かべたのです。

戦前の校舎には校門近くに忠魂碑というものがありませんでした。生徒は登下校の折必ずその前で立ち止まり、威儀を正して深く礼をして行き来したものです。今の高校生には想像もつかないことだと思いますが、国のために戦って死んだ人々の魂をまつり、働きを讃えることは当時の学校では強く指導されていたので、生徒は厳肅な思いで最敬礼をして通ったのです。それは確かに日本の軍国主義の下での学校教育の形であったわけで、戦後は当然のこと否定されたものではありません。しかし、朝夕のその作法は生徒にとって、学校という学びの場を世間の通俗から切り離し、心身に「けじめ」を持たせて勉強に向かう心構えを促すものであったと思われまします。

新校舎への寄付はせつかつくならば、新しい時代にふさわしい形で学校に風格を与え、生徒の心に「けじめ」をもたらしようなものをお贈りしたいものだと考えました。

◆人物紹介◆

・小林 肇(こばやしはじめ)氏

昭和四年生。能代市扇田字道地出身。昭和十九年旧制能代中学校へ入学、同二十三年卒業。東京中野区に本社を置く家庭用品・日用品卸業、株式会社「友和」を創業し、一代で日本有数の会社にて育てあげた。現在は会長を務める。平成二年以来十年間、本校の東京同窓会会長として、関東地方在住の卒業生の親睦や母校発展のために多大な尽力をしてこられた。

第一体育館に掲げてある校歌の扁額も、小林氏の寄贈によるものである。

・鎌田 宏(かまたひろし) 元校長

昭和四十九年三月から五十年七月まで、丁

度本校が旧樽子山校舎から現高埕新校舎へ移転したときの校長。旧制能代中学校では国語の教諭を務めた。五十年の年度途中に能代市教育長へ転出。随筆家としても知られ、「一番桜」「古草新草」など多くの著作がある。平成十二年没。

・戸松恭一(とまつきよういち) 先生

本校を昭和三十四年に卒業後、秋田大学で美術を学ぶ。専攻は彫刻。本校に昭和四十八年からと六十三年から二回勤務し、甲子園に出場した硬式野球部部長なども務めた。

能代工業高校バスケットボール部の全国大会優勝三十回達成を記念する「栄光」の像、市文化会館ホールにある柳谷清三郎元市長の胸像など、県内各所に先生の作られた像が置かれている。



「自在の像」の下で全員写真

昭和52年、「自在の像」の下で撮影した卒業記念の全員写真。ここに写っている生徒は第48期生で、現在は41歳～42歳。校舎のまわりはいちめんの田んぼで、写真奥に仁井田の倫勝寺の木立ちがまっすぐに見わたされる。冬季には地吹雪で「幻城」と化してしまう校舎に向かって、生徒は雪をこいで通学した。

今は駐車場になっている第1体育館横の空き地はこの頃は自転車置き場。市道から校舎に至る道路も、今より北側にあったことがわかる。

その後鎌田校長から東京へ電話をいただき、一度能代へ来るようにとのことで、早速お伺いしました。鎌田校長と浅野洋一先生（私の能代中学校時代の同級生で、当時音楽担当の

教諭）と私の三人で話し合った中には、へ校長室の机などの案もありましたが、いろいろ話し合った末最終的にはブロンズの「彫像」を造つたらどうかということになりました。

—— 今にして思えば、〈校長室の机〉などではなくて本当に良かったと思いますが、それにしても「彫像」というご提案はどのようにして生まれたものなのでしょう。ようか。

私は仕事でたびたびヨーロッパへでかけることがありました。例えばバリの町などを歩くと至るところに銅像があります。誰が作ったとか誰の像だとかいうことではなくても、それが町の空気の中にしっくりとけ込んでいます。そういう風景を「いいものだなあ」といつも思っていました。美術館にしろ博物館にしろ、そういうものが一般社会の生活の中に根を下ろしている文化の深さ、歴史の奥行きのようなものを学校に持たせたいという気持ちで、「彫像を」という私の提案になったのです。軍人などの有名人を記念した像ではなく、もっと別な像ができれば……と思います。描いたのです。

—— 像の制作はどのようにして進められたのですか。

ブロンズ像のフォームは私が申し上げました。青年の立像。大胆で赤裸々な、人間そのままの、何の束縛もこだわりもない裸像をとお願ひしました。大地にしっかり足をつけ、広い世界（宇宙）を目指して天を指す。曇りのない澄んだ目……このようなことも申し



「自在の像」にふんどし！

はっきりしたことは不明であるが、昭和55～56年ごろから、能高祭のときに「自在の像」に能高祭実行委員の手でふんどしがはかせられるようになった。今年度は赤い布地であったが使う布地はその年どしの流行の色や柄になることが多く、ストライプや水玉模様、ひまわりの模様のふんどしであったこともある。

「北高生が来たら、目のやり場に困るだろう」との理由からだった、という話も伝わっているが、言うまでもなく、能代高校生の「自在の像」に対する親愛の情をあらわす、ゆかいな祭りの伝統である。

ました。

像の制作は誰に依頼するかという話になったとき、鎌田校長はすかさず、「それは本校の美術教諭の戸松恭一君だ」とおっしゃいました。戸松先生は同窓生でもあり、大いに賛成した次第です。後で聞いた話によると、戸松先生はその後校長室に呼ばれて説得されたとい

うことです。

戸松先生とはその後何度も打ち合わせを行いました。東京へきてもらって彫像のことやフランスでの感動などもお話ししたり、また箱根にある彫刻の森美術館や伊豆の彫刻ロマン街道を一緒に回ったりもした記憶があります。これは彫像に対する私の気持ちを理解し

てもらったためでした。

原型は戸松先生が描きました。デッサンを囲んで鎌田校長と細かい注文をつけたりもしました。若い男の裸の像では、男女共学の学校でもあるし具合が悪いのではないかという話が出たりしましたが、自然体がいい、三十年、五十年たってみろ、そんなことは何でもなし、芸術作品としての基準をあてはめるだけでいいという結論に至りました。

戸松先生は情熱家で、たくましい創作意欲がありありとかがえしました。彫像の原型づくりは戸松先生のご家族、特に父上のご協力を得てご自宅をアトリエにして造りました。像のあまりの大きさに、家の天井を抜いて造ってくださったと聞いており、今さらながら頭の下がる思いです。

—— 彫像の寄贈は、小林様お一人です。くださったのですね。

彫像を寄付するということが決まって、さて、どのような形でその事業に参加したらいいのか鎌田校長に尋ねたところ、校長先生は「君がひとりやれ」というようなことをおっしゃいました。

私はそれならそれでもよいのですが、能代高校ですから私よりもっと有名な方がたくさんいらっしゃいます。後々の学校の名誉のためにも、もっと名のある方々にも協力をお

願いはどうかと私は申し上げました。
その時校長先生は「だから君なのだ」とおっしゃいました。

世の中には、貴人、賢人、有名人がその道その道でたくさんいるものだし、成功者、資産家、財産家、有力者と言われる人も多い。そういう中で、『読み人知らず』の名作もあるものなのだ。これから世に出ていく生徒たちに、無名の人でも人知れず努力を続け、成功し、人に喜ばれることをしている人がいることを、無言で教えたいのだ——鎌田校長はこのように言われました。

鎌田校長のこの教えを、私は人生の指針として今も大事にしています。社員に向かって

「誰かに自分のやっていることを報告してわかってもらうこと、喜んでもらうこと、それが働く上での励みになり、長つづきする因にもなる。そうすれば楽しく仕事ができるのだ」とよく話して聞かせています。

——「自在の像」という名前がつけられたのはどのような由来でしたか。どんな思いがこの命名には込められていたのでしょうか。

「自在の像」という命名は鎌田校長によるものです。「自在」という言葉は洪自誠著『菜根譚』の一節である「心身何等自在」から採っています。



「自在の像」除幕式

昭和50年10月1日に「自在の像」の除幕式が行われた。中央の椅子に小林肇氏と小林繁春校長はじめ当時の職員と工事関係者が着席している。在校生は3年生だけが参列した。像の脇に、建設会社のトラックも見え、紅白幕もないところからすると、まだ開式前の風景のようである。

「自在の像」のプレート

台座正面に、銅製のプレートがはめ込まれている。筆跡の特徴から鎌田校長の筆になるものと思われる。師弟の暖かい交流がしのばれる。



ブロンズ像の原型が完成し飛騨高山の铸造工場へ搬送した頃のある日、鎌田校長が私のところへ見えて、『菜根譚』の原文を示しその意味を説明してくださいました。(注②参照)

「何事にも左右されない大自然の中に自己を置くことによって、束縛されることのない自由な発想や自然な動きができるのだ」——こんなことも話されたように記憶しています。

青年が心身を鍛え、自らの目標を高く掲げ、努めて勉強し、何事にも動じることなく堂々と意思表示し、自由自在に力強く前進する、能代高校はそんな気風を作ってほしいという願いが、この像には込められていると言ってよいと思います。

「自在の像」は、昭和五十年十月一日、創立五十周年式典の前々日に据えつけました。そ

のときは次の小林繁春校長に代わっていました。特別に盛大な除幕式というようなことはなかったため、小林校長がひどく恐縮してくださいましたが、私はそれでいいと思っていました。

—— 今改めて「自在の像」をご覧になって、どんなお気持ちですか。

本当に良かった、無名でよかった、と改めて思っております。はるか後輩たちが何のわだかまりもなくそばに寄って親しんでくれる、何となく生徒の思い出のひとつになっているようでうれしい気持ちです。また、学校でも生徒会や同窓会でも、その後ずっと「自在の像」を大事にしてくれていることを知り、感謝しております。

当時は少し大きすぎるかとも思ったのですが、大きくてよかったなあ、とも思います。据えつけの日、クレーンで釣り上げて台座にのせる作業を、戸松先生の父上が遠くから見守っておられたことを今も忘れません。父上はそういう方でした。

またこの像の制作者名を、戸松先生はどこにも刻んでおられません。彫刻というものは、本来誰が作ったかを問うものではないというようなお話を聞かされましたが、私としては残念に思っております。



〈終わりに〉

学校というところは生徒も職員も年々変わっていくところなので、きちんと残すべきものを残さないでしまうことがあります。十分とは言えませんが小林肇氏から直接うかがったことを書きとめることができてうれしく思っています。ご協力いただいた浅野洋一、続隆、渡部嵩、岡卓夫、藤田一樹の各氏と佐藤写真館さんにお礼申し上げます。

注① 昭和十九年二月、樽子山にあった校舎は火事で焼失した。火災に遭遇した旧制能代中学校最後の生徒たちは、旧長根町の淳城第一国民学校（今の能代市役所第一庁舎の西側、けやき公園の北側の位置にあった）の空き校舎を使った仮住まいで高校生活を送った。

二十三年三月に、元の場所に新校舎が再建されたが、敗戦直後のすべての物資が著しく事欠く中で、新校舎を建てることに奔走してくださった方々の努力や県当局の英断は、当時を知る人々の間で今も感謝を込めて語られている。

注② 『葉根譚』さいこんたん 中国明代

の末期に儒教・仏教・道教を学んだ洪自誠という学者が、自身の体験を基に、味わい深い人生の哲理を三百五十七の短い文の形で著した語録。

「自在」という言葉は次のように掲げられた文の中にある。

古徳云、竹影掃階塵不動、月輪穿沼水無痕。吾儒云、水流任急境常靜、花落雖頻意自閑。人常持此意、以應事接物、身心何等自在。